

# 教宣 せぶん

## 東京地裁つながり

昨夜、ニュースを見ていると、見覚えのある場所がテレビ画面に映りました。通い慣れた東京地方裁判所の玄関前です。主役として映し出されたのは日本航空のキャビンアテンダントの方々。私たちと同じように、ゼッケンを身につけ、道行く人にビラを配り、マイクを持って訴えている光景にしばし目が釘付けになりました。

日本航空の客室乗務員の病歴や思想信条などを含む大量の個人情報のリストを日本航空の最大労組であるJAL労働組合(JALFIO)が本人に無断で収集・保有。その個人情報には、本来会社しか知りえない内容も含まれており、客室乗務員や所属する日本航空キャビンクルーユニオンがJAL労組や会社を相手取り、損害賠償を求める訴えを東京地裁に起こしたというニュースでした。このニュースは26日から27日にかけて、多くのテレビ局が大々的に取り上げましたが、人権侵害やプライバシー侵害を含む、そして個人を誹謗中傷するその内容のあまりのえげつなさに、各局のキャスター、コメンテーターとも「怒り」を通り越して「信じられない」「呆れた」という表情を浮かべていました。訴えられた側が、まったく申し開きできない事件なのではないでしょうか。

大企業と企業内にある最大労組が結託し、声をあげる小さな労働組合に所属する組合員を徹底的に虐げる典型的な事件です。訴えた客室乗務員の方々も、きっと自分が勤める会社が社会的な批判にさらされることは本意ではなかったはずです。しかし、個人情報の中味を見てもわかるように、裁判に訴え、世論に訴えていかなければ、どうしようもないところまで追い込まれていたのだと思いますし、そうでもしないとJALという企業は変わらないと判断したのでしょう。

そう言えば、私たちが3月26日の地位確認訴訟の判決を勝ち取った際にも、やはり同日JALのキャビンアテンダントの方々が会社を相手取って行った訴訟が勝訴し、話題をさらわれた一幕がありました。記者会見場に多くのカメラが持ち込まれていたのが期待したのですが、私たちの後に会見するJALの方々を写すためのものでした。しかし、後日、私たちの本社前抗議行動にこのJAL訴訟の関係者の方もマイクを持って立ってください、働くものの連帯の輪がしっかりと結ばれています。

いずれにしても、こういった権力を持つ側の横暴が一日も早く日本の企業から一掃されることを願って止みません。そのために私たちもJALのキャビンアテンダントの方々同様、勇ましくたたかっていきます。